

2021/11/14

(うときゅういっきの「これから」 「情」の説明2)

このシリーズ、最初の記事「結局のところ」で「人情」と書き、
言いたかったことが余り伝わらなかった様なのでこの記事の直前記事「情の説明」で
「人情」と「情報」を対比して共通項である「情」について書いてはみたものの、その真意
をお伝えするにはまだまだ程遠い様な気が致しまして、
今回「情の説明2」では

「情」の元となっている「感情」について書いてみたいと思います。

話は少し飛びますが、既に述べました様に外国人従業員と3年半の間同じ釜の飯を食べて
きました。その中で分かった事は

「文化や習慣は異なっても生起する感情自体は我々と何ら変わる処はない」

そして

「その生起した感情をトリガとして次の思考なり行動が生起するのも同じ」

であるので文化や習慣の差に着目するよりも

「その感情、即ち喜怒哀楽という我々日本人との共通項を重点的に観察する事の方が外国
人を理解するには選り有効である」

と言う事でした。

では本題。

「感情」と書くと必ず「理性」と対比されます。

ましてや「人情」と書くと「なさけ」「おなさけ」「お涙頂戴」ものと見なされます。

なので「感情」も「人情」も非理性的、非論理的で言い方は悪いですが「制御不能の弱みに
つけ込まれる元となる厄介者」の印象が拭えません。

故に「抑える」か「排除」したいと。

例えば昨今の恋愛観で「本当に惚れた相手とは結婚しない。コントロールされたくない。自
分をコントロールできなくなるのも嫌だ」というのが感じられるのもその一端かもしれま
せん。

そこでご提案。

「感情」と言う詞に対する視野を今少し広く取ってみてはどうでしょうか？

と。

例えば、

「理性＝顕在意識野に対して感情＝潜在意識野」

と言う光の当て方。

と言うのも是迄の自分の観察に依れば

「人の行動の実際の動機は世に言う大義名分でも大きなイベントとの遭遇がきっかけでも
なく、自分でしていながら余りの些事ゆえ記憶にすら残らぬ、取るに足らない心理的揺らぎ
がきっかけになっている場合が殆どの様だ」

と見て取れたからです。

今から数年前、大手広告代理店の女性新入社員が自ら命を絶ちました。

「長時間残業→うつ病→自殺」という凶式の元、労働（残業）時間短縮、働き方改革が促されました。

しかし自分が見るに是は「表層改革」でしかない様に思えます。

「嫌な職場だったら 120 時間はおろか 1 時間でも残業したくない」

筈です。

それどころか

「就業時間内でも職場に 1 分たりとも居たくなかった」

筈。

（うつ病時代の自分がそうでした）

なので、自殺の真のトリガは「労働時間」等ではなく

頑張っていたのに

「髪の毛ボサボサで女子力ないよな」

と言った本人すら覚えていない様なちょっとした、こころない一言が真のトリガだったのではなからうか、と。

働き易い職場なら残業なんて案外気にならないもんです（経験上）

是こそが感情（心理）の成せる技ですから。